

生成AIの進化に伴って、その活用と悪用対策の両面で、新たな仕事や産業が生まれつつある。AIを支える人間の役割は主に二つ。①AIに正しい知識を与えることと、②AIの正しい動作や運用をチェックすることにある。生成AIを活用するには、高度な数学や専門の言語ではなく、自然言語、画像、音声といった人間の理解できるデータが必要になる。そのため、こうしたデータと向き合う仕事、つま

り「データワーク」と呼ばれる仕事の領域が拡大すると考えられる。AIとデータワークの関

言葉や表現の意味を正しく分類したりする、特殊なスキルを必要としない、大量の単純作業が中心であった。アルゴリズムの進化や学習済みの生成AIの登場で、一般的な教師データ作りの必要性は明らかに減ってきた。



黒田 由加（くろだ ゆか） コンサルティング事業本部ココロミルラボ副室長

AIを支えるデータワーク

生成AI時代の仕事(3)

係は古く、AIに学習させるための教師データ作りは、30年以上前から行われている。その多くは、写真に写っている物体を領域分割してラベルを付けたり、

その一方で、より専門的で限定的な知識に関するデータワークが求められている。地域、業界、企業固有の状況や作業手順に関する知識などの多くは、頭の中だけにある「暗黙知」でデータになっていない。データのデザイン業務では、ク

ライアントからの要望は、「今っぽくして」など感性や感覚的なものが多い。生成AIは、そうした指示から即座にデザインの修正候補を提示できる。生成品質をより高めるためにデータワークが重要になる。こういう要望の時には、デザインを具体的にどう変更するとよいかという手順や好事例を整備して活用するのだ。また、生成AIに意図的に偽情報を作らせたり、生成AI自体も社会的・倫理的に問題のある回答をした

システムでは、AIを導入しても、人間が積極的かつ体系的にチェックに関与し、誤りを正すという「データワーク」のプロセスは不可欠と言える。地域での粗大ごみ相談窓口、観光案内、手続きの案内などにAIを活用する場合、その地域でのルールや手順を丁寧に言語化することも大事だが、作りっぱなしではなく、きちんと正しく回答できているかについても常にチェックをしながら、修正を行うことが大事だ。生成AIを有効活用するには、こうしたそれぞれの役割の「データワーク」を地域や企業で、継続的に取り組むことが重要なのだ。（毎週木曜日に掲載）

